

シンポジウムの趣旨説明

岩 佐 和 幸

最初に、私から今回のシンポジウムの開催趣旨について説明をしたいと思います。現代の日本の地域のあり方を考える上で、グローバリゼーションという視点は不可欠なものになっています。しかし、現在流通しているグローバリゼーションの思考は、しばしば中央や都市部を前提とするものであり、地域の実情にそぐわないものがかなり多いのではないのでしょうか。

例えば、現在の日本でも、さまざまなグローバル化言説が流布しています。しかし、その多くが中央の政財界や文化人エリートによって発せられる言葉が各地に流通しているのが実態です。例えば、現在の政府は、「グローバル競争に打ち勝つ」、あるいは「世界で一番企業が活躍しやすい国」を目指すとうたっています。しかし、グローバル経済下で進んできたのは、ご承知のとおり、東京への人口や産業の一極集中であり、地方や農村部では産業や地域社会の衰退、あるいは縮小再生産が進んできています。アベノミクス効果も一向に恩恵が及んでいないというのが、世間の一般的な声であると思います。

こうした背景から、今、「地方創生」戦略を政府が打ち出しています。しかし、この戦略のきっかけになっているのは、日本創成会議での「増田レポート」でありまして、同レポートでは名指して「消滅可能性都市」というようなことがうたわれています。そして、地域拠点都市への選択・集中を進めることが提言されています。したがって、いわゆる「農村たたみ」と呼ばれているような周辺地域のスクラップが今後進められるのではないかといった危惧が、各地から寄せられています。

もう一つ、大学との関係で言うと、「グローバル人材」という言葉が最近叫ばれています。この点に関しても、少し触れておきたいと思います。この間、日本の高等教育政策は、国立大学の改革や機能分化を推進する路線をとってきました。現在、各大学でさまざまな改組が進められています。そのような中、昨年10月、文部科学省の有識者会議で、ある経営者の発言が大きな波紋を呼んでいます。その中身は「一部のトップ校を除いて、ほとんどの大学を職業訓練校とすべき」というものです。具体的には、日本の高等教育を、グローバル人材を生み出す「G型大学」と、その他のローカルな人材を生み出す「L型大学」といった形に区分し、現在の大学制度そのものを見直せというものでした。例えば、「文学部はシェイクスピア、文学概論ではなく、観光業で必要になる英語、地元の

歴史、文化、名勝を説明する力を身に付ける」、あるいは「経済・経営学部はマイケルポーターや戦略論ではなく、簿記・会計、弥生会計ソフトの使い方を教える」「法学部は憲法、刑法ではなく、道路交通法、大型第二種免許を取得させる」といった事例が挙げられます。このように、中央の財界人の大学機能分化論は、ある意味、無定見な暴論にすぎませんが、中央の財界人が地方を一体どのようなまなざしで見ているかの一例ではあるかと思えます。

ところで、こうした中央から眺望したグローバル化言説とは裏腹に、地域に目を凝らすと、中央から見た数字だけでは語れないような豊かで新しい動きが起きています。世界都市・東京のアンチテーゼとして日本の「縁辺部」と呼ばれる地域でも、移住者の増加・「田園回帰」と呼ばれるような個性あふれる地域が続出しています。加えて、こうした交流は、国内にとどまらず、今日お話があるようなローカルなレベルを土台に、国境を越えて幅広く交流するさまざまな取り組みも展開されています。このような取り組みは、中央のマスメディアなどではあまり注目されていませんが、実は、こうした地に足の付いた取り組みこそ、（地方創生ではなく）地域再生の方向性や「グローバル化時代に地域がどのように向き合うべきなのか」といったヒントが隠されていると思えます。

そこで、本日のシンポジウムでは、具体的な地域に根差しつつ、世界とつながろうとするさまざまな取り組みを共有しながら、そうした具体的な場での実践に基づき、地域ならではの世界とのつながり方の可能性を探ろうという企画で、今回セッティングしています。具体的には、青森、徳島、高知のケースが紹介される予定ですが、ローカルな実践例に見られる個別性と普遍性を意識しながら、高知ならではの世界とのつながり方について、皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

まずは、パネリストの方々から刺激的な問題提起を頂きます。その上で、フロアの皆さんを交えた活発な討論をしていきたいと思っていますので、皆さんどうぞよろしくお願いたします。

(いわさ かずゆき 高知大学教授)